

Title	耶蘇會士日本通信上卷(村上直次郎譯, 渡邊世祐註, 聚芳閣發行)
Sub Title	
Author	吉田(Yoshida)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.3 (1927. 9) ,p.156(468)- 159(471)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270900-0156">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270900-0156</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

知られなかつた岩崎小彌太氏所藏民經記及び紙背の文書が、主要なものとなつてゐる。その他、美術工藝史、社會事業史、及び宗教史等の方面の記事で、注意すべきものもある。尙御物の春日權現記に見ゆる勸修寺晴雅入寂の圖、及び醍醐寺所藏の權僧正成賢の讓狀の如き、世に稀少なものゝ寫眞が挿入されてゐることが喜ばしい。(宮島貞亮)

### 耶蘇會士日本通信上卷

村上直次郎譯  
渡邊世祐註  
聚芳閣發行

近時、南蠻紅毛、切支丹さては明治文化に對する世の人の興味又は研究には、眞に一時期を劃するかと思はれるものがあつて、之等に關する著書の簇出は、此の間の消息を物語つてゐる。聚芳閣企つる所の異國叢書の刊行も亦その一に外ならぬのであるが、こゝは其の書目の選擇と、その譯註者が、いづれも斯界の權威にしてその擔當理想的とも云ひつ可き程に宜しきを得たる點に於て、到底他の追隨を許さぬものがある。昨秋之が計畫を知りたる時、私は喜び禁じ得ぬものがあり、その發刊の日の一日も早からんことを待つたのであつた。

かくて、その叢書第一卷は、其の内容に相應しき裝ひして先月漸く世におくり出された。即ち村上直次郎博士譯、渡邊世祐博士註するところの耶蘇會士日本通信上卷である。之は昨年九月、同じ譯者の手になりて長崎市役所より發允されたる長崎叢書第二卷耶蘇會年報第二卷と妹妹篇をなすものであつて、共に一五九八年

ポルトガル國エボラ町 Évora の F. M. H. L. de Almeida Manoel de Lya が出版にかゝる「耶蘇會のメソドン及びイルマン等が日本及び支那兩國より印度及び歐洲の同會員に贈りたる一五四九年より一五八〇年に至る書翰第一編」 Cartas que os Padres e irmãos da Companhia de Jesus escreveo rio dos Reynos de Japão e China aos da mesma Companhia da India, & Europa, desde anno de 1549. até o de 1580. Primeiro Tom. と題するポルトガル文の書翰集中より前者は主に長崎、平戸、大村、島原、天草、豊後等九州各地に關係ある一五五一年より一五七〇年に至る四十七通の書翰を收め、後者即ち今手にしたる一卷は京畿の地方に關する一五五九年より一五六九年に至る三十一通の書翰を收めてゐる。

蓋し、天文十八年、始めてザビエル上人我國に渡來して、具さに日本の國情を視察して布教の大計畫をたて、以來、耶蘇會宣教師の來りて在留する者、年と共に多きを加へ、布教の區域は、九州より近畿地方に及び、宣教師は年々布教の状況を報告して、ローマ本部、又は各國支部との連絡を計り、本部また同會の業績を普く世に知らしめんが爲に、之を出版した。之等の書翰は、常に布教の状況を報ずるに止まらず、苟も彼等宣教師の目に影じたるものは、其の何たるを問はず、細大漏らすところなく悉く之を丹念なる筆に傳へてゐる。されば一度之を繙く時は、當時我國の風俗習慣、各地の戰況、天變地異等、所謂當時の世相を、遺憾なく伺ひ識ることが出来る。(之が異國人なる宣教師の眼を通して見たる世相たることに心すべきは云ふまでもない)

さて、此の「耶蘇會士日本通信上卷」に採録されたる書翰は我が基督教史上一體如何なる時代を含むのであらうか。けだし耶蘇會宣教師中、最も早く京都の地を踏みたるものは、云ふ迄もなくサビエラ上人その人である。(天文十九年十二月)然し時宛も京都は戦亂の際とて、彼は滞在僅か十餘日にして、後に心を残しつゝ引還し、平戸を経て山口に赴き、更に豊後に至り遂に天文二十年十月布教の計畫をたて、日本を立ち去つた。彼が蒔きたる種子は數年を出でずして實り、九州各地に於ける基督教傳播の迅速にして隆盛に赴きし事、寧ろ意外の感を起さしめるものがある。やがて九州に於ては、或ひは佛教徒の激烈なる反對を受け、或ひは戦亂の爲に、たま／＼九州各地の耶蘇會士皆一時のがれて豊後府内に集つたことがある。(永祿二年)當時、日本在留の耶蘇會士の長たる位置に在りしパードレ・コスモ・デ・トルレスは、徒らに此の機會を逸することを欲せず、弘治二年六月渡來して一時豊後に留りて、布教の傍ら、語學の修業をなし、次いで平戸に赴き(弘治三年八月)、更に博多に移り(永祿元年夏)、後豊後に歸り居たるパードレ・ガスパル・ビレラを以て京都に派遣することとした。之れ即ちサビエルが始めて京都の地を訪れて以來、正に九年目に相當する。此處に於て、ビレラは「語學に達し智慮ある」「道德の事に付我等のイルマンに等しき」日本人のイルマン・ロレンソと同じく日本人のイルマン・ガミヤンとを同伴し、永祿二年八月豊後を出發し海路界に向つた。本書載するところの第一書翰(一五五九年九月一日附日本發ビレラよりゴアのコレシヨのイルマン等に贈りし書翰の一節)は先づ彼ビレラが豊後出發と行を共にしてゐる。九月

彼は阪本に着し、天台の坐主に面會せんが爲に種々努力して果さず、遂に意を決して京都に入り永祿二年十二月二十八日(一五六〇年一月二十五日)下京に小屋を借り受けて、説教を開始した。其の後、將軍義輝に謁して、布教の特許状を得るに及んで、(第十二、一五六四年七月十五日附都發、パードレ・ガスパル・ビレラよりポルトガルのパードレ、イルマン等に贈りし書翰)聽聞者一時に來集し、其の教に歸依する者漸く増加するに至つた。因て六角に移り、更に四條烏丸に轉じ、終に四條坊門に家屋を購つて、會堂に充てることになつた。(彼が京都に入りて會堂を開くに至りし事情は第五、一五六一年八月十七日附堺發、ビレラより印度のイルマン等に贈りし書翰に詳しい。)かくて布教の効果は次第に著はれ、教勢愈々盛なるに及んで、佛教僧侶の反對も亦激烈となり松永久秀にパードレ等の追放を迫るに至つたのである。こゝに於て、ビレラは一時八幡に遁れて、反對者流の銳鋒を避け、數日後、再び京都に潛入して、暫くキリシタンの家に隠れ、次で會堂に歸ることを許され、永祿三年(一五六〇年)の降誕祭には、約百人のキリシタンと共に之を祝した。

宛も其の頃「ベニス市の如く執政官によりて治めらるゝ」堺の有志より宣教師を派遣せられんことを豊後に請求し來つた。其處でトルレスはビレラを同地に赴くことを命じたるより、ビレラは永祿四年七月(一五六一年八月)、京都の會堂を重立ちたる信徒に託して堺に赴いた。(第五書翰)ビレラはその始め數ヶ月間、堺に滞在し、同年の降誕祭は京都で祝ふ豫定であつたが、出發後間もなく六角義賢京都に侵入し、畠山高政は根來の衆徒と共に之に應

じて三好一黨と戦ひ、爲に畿内の地は大いに亂れたるにより(第八、一五六二年堺發ビレラより 耶蘇會のバードレ及びイルマン等に贈りたる書翰) ビレラは堺に止ること約一年永祿五年八月(一五六二年九月)に至つて、始めて京都に歸り翌年の春まで、教徒が教化と布教に従つた。然るに、京都は復た戦亂の巷と化したるにより、再び堺に引上げ、同年夏奈良に招かれて結城山城守等數人を歸依せしめたる後、京都に歸り、翌年飯盛に出張し、三好長慶の家臣中に多數の信徒を得、次いで大和、河内、攝津の所々に布教した。(第十二書翰、第十三、一五六四年十月九日附平戸發、イルマン・シヨアン・フェルナンデスより支那の某バードレに贈りし書翰)

かく近畿の布教事業進捗せるにより、永祿七年十一月、バードレ・ルイス・フロイスはビレラの補助たらんが爲にイルマン・ルイス・ダルメイダを同伴して、豊後を發して堺に渡り、一層保護を加へられ布教の大發展を招致するに至つた。(この間の事情は第十六、一五六五年十月二十五日附、福田發、イルマン・ルイス・ダルメイダより耶蘇會のイルマン等に贈りし書翰、第十七、一五六五年二月二十日附都發、バードレ・ルイス・フロイスより支那及び印度のバードレ、イルマン等に贈りし書翰、第十八、一五六五年三月六日附都發、バードレ・ルイス・フロイスよりバードレ・フランシスコ・ペレス及びイルマン等に贈りし書翰に詳しい)ダルメイダも亦堺より飯盛に出で、次いで京都に到り、奈良、十市、澤の各地のキリシタンを巡訪して、永祿八年四月(一五六五年五月)堺より海路豊後に歸つた。

永祿八年五月(一五六五年六月) 三好義重松義久京都に入つて將軍義輝を弑し(彼等の目に影じたる將軍弑逆の状況は第二十、一五六五年六月十九日附都發バードレ・ルイス・フロイスより豊後のバードレ及びイルマン等に贈りし書翰に記してある)、又僧徒の請を容れて、同年七月初(一五六五年七月末)、ビレラ、フロイス等を追放した。爲に兩人は一時飯盛に通れ次いで堺に引上げた。(第二十二、一五六五年八月三日附三箇發フロイスバードレ・コスモ・デ・トルレスに贈りし書翰) 爾來絶えず京都復歸の策は講ぜられたのであるが、目的を達することは易からず、ビレラは永祿九年四月(一五六六年四月) 豊後に召還され(第二十六、一五六六年六月三十日附フロイスより耶蘇會のバードレ、イルマン等に贈りし書翰)、フロイスは日本人イルマン一人と同宿三人と共に留つて堺を中心とし、時に畿内各地の信徒を見舞ひ、又尼ヶ崎及びその隣接の地に布教した。

やがて織田信長が將軍義昭を奉じて入京するに及び、永祿十二年三月(一五六九年三月)、フロイスは和田惟政、佐久間信盛等の斡旋に依つて再び京都に入り、會堂を回收し布教に従事するに至つた。(第三十一、一五六九年六月一日附都發、フロイスよりバードレ・ベルシヨール・デ・フイゲレドに贈りし書翰)本書は此の第三十一書翰の半ばで終つてゐる。

之を要するに本書採録する所の書翰はすべて三十一通(内一節若しくは數節を抜粹せるもの八通、而して最後の一通は終末を見るに至らず、下巻に續くことになつてゐる)ビレラの豊後出發(永祿二年)よりフロイスが京都に入りて再び會堂を回收するに至る

(永祿十二年)十年間京畿地方に於ける布教の有様は之等書翰を繕讀する中に宛然繪卷物の如くに展開する。

その間、先に既に述べたる如く、彼等の目に影じたるほどのものは何たるかを問はず微に入り細に入り、例へば人に會へば具さにその風貌を記し、人の服裝を見てはその髻より足袋に至るまで漏らすことなく、又佛寺に詣ててはその偶像とのしる佛像の美にうたれその建築を正直にたゝえてゐる。而も彼等の筆になるところのものは、いとゞ彼等の熱誠、いつしか、ものゝ眞にわれるところあつて奇しき魅力に富み、時に「石の心を持てる者も感動せざるを得ざる」ものがあり、一度繙けば殆んど巻を措く能はざらしめる概がある。實に單に日本の基督教史上に貴重なる資料たる事は云ふ迄もなく、又國史の他のあらゆる方面の研究にも利用する可き性質を帯びてゐる。

今本書を讀了するに當つて、私は村上博士の忠實なる翻譯と渡邊博士の親切なる註とを、併せ讀むことの出來たことを深謝するものである。又卷末に耶蘇會のローマ字綴方表並びに索引を附せられたる親切も特筆したい。たゞ惜しむらくは興趣を添へる可く挿まれたる信長の像以下四葉の寫眞が本書の他の部分に比して餘り珍らしからぬものゝみであり、而もその製版が他の裝幀、印刷等に比して粗惡なことである。とまれ、私は此處に譯註者の眞摯なる努力に對し滿腔の感謝を捧げると共に、かゝる良書を敢て刊行されたる聚芳閣の多幸を祈り、同書下卷その他上梓の日の一日も早からんことを希ふ者である。(吉田)